漁業者として生物多様性にどこまで関われるか

（第2回生物多様性国家戦略小委員会：2012年4月12日）発表内容

木更津金田の浜活性化協議会　金萬 智男

2004年～2007年を中心の活動

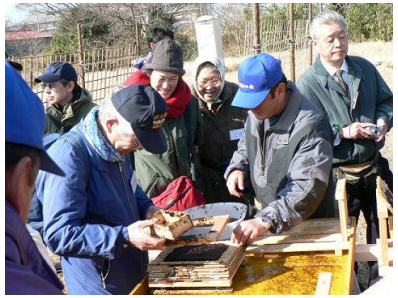
【NPO法人盤洲里海の会の活動】

・2004年に漁業者10人で設立し市民約120人の会員と共に盤洲干潟（千葉県木更津地先）に関わる活動を実施。

・主な活動は、絶滅危惧種アサクサノリ復活、干潟環境学習、漁業体験を行う。

海苔つくり体験（2004年～2012年継続中）

昭和30年代以前の方法で海苔を摘み、抄いて、干し、鉄砲巻き（漁師の海苔巻き）を自ら作り食べるまで実施するプログラム。海苔に必要な自然環境と東京湾の文化等の勉強も兼ねる。

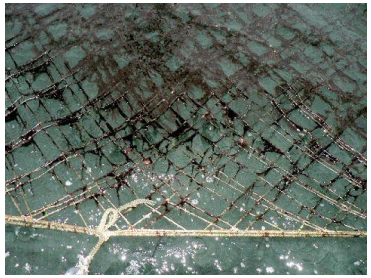


干潟探検（2004年～2012年一部継続中）

盤洲干潟、小櫃川河口を中心に干潟の生き物観察を実施。「タモ網持って遊ぼう」「ミニ水族館」「アクアラインの下の生き物」等々で漁業生産以外の生き物を各専門家を招き食物連鎖等の重要性を勉強。

絶滅危惧種アサクサノリ復活プロジェクト（2001年～2012年継続中）

レッドデーターブック絶滅危惧種Ⅰ類に指定されるアサクサノリの復活を手がける。2001年から2003年まで個人で実施も不成功、2004年から会で実施後に生育成功。2003～4年に熊本・河浦町に原種採取。2004年～6年に多摩川河口にてアサクサノリ調査及び観察会実施。当初6名も休業等により4名のみ実施中。



お台場で海苔柵（2006年～2012年継続中）

40年前まではお台場の海でも海苔養殖が行われていました。小学校の環境学習として横浜のNPOや東京の遊漁連、自治体と協働で海浜公園で海苔網を張り育て「食べ物が育つふるさとの海」つくりを実施。

逆さ竹林生態系保全（2007年～2008年）

カイヤドリウミグモ繁殖により藻場再生の重要性を認知するも海苔養殖との兼ね合いがあり安易に藻場造成が出来なく、所属漁協と共に「盤洲干潟里海保全委員会」設置し逆さ竹林漁礁を活用し稚魚を育む試験を実施する。

間伐材を活用した干潟のビジターハウス（2005年～2007年）

夏場の干潟活動で「日陰が無く辛い」「トイレが欲しい」等の要望があり、小櫃川源流の林業の方と連携してログハウス方式によってビジターハウス（海めぐりの里ビジターハウス）を仮設する。産廃の撤去からメンバー中心で建設後に生き物カード、レンタルバイオトイレ、設置等実施し無料で市民に開放するも、市街化調整区域で2年間の仮設で撤去する。

海から山への贈り物（2007年～2012年一部継続）

海藻に含むヨード分がアジアの山岳民族に不足し健康障害を受けてるのを知り、NGO団体と連携し、規格外の海苔やワカメを提供し支援する。その後、横浜で行われるワークショップで市民が育てたワカメも提供することになる。

その他の活動（2004年～2012年一部継続）

干潟の定置網とも呼ばれるスダテを活用したタッチOKのスノーケリング、川で繋ぐ森・里・海の連携エコツーリズム、地元小学生を中心とした海苔柵見学会等も不定期に実施する。

2008年～2011年を中心とした活動

【東京湾に打瀬舟を復活させる協議会の活動】

・2008年1月から本格調査開始し、5月に東京湾の海に関わる有志で組織する。

・東京湾再生のシンボルとして打瀬舟の新造を目的とし、環境にやさしい漁業復興、森林の保全、藻場の再生、舟大工の技術継承さらに環境・海洋教育を通じ、豊かな海美しい東京湾を目指す。

2008年

鳥羽、浦安、行徳、北海道の野付等々に行き調査を開始する。

2009年

横浜藻場見学会、舟の森・山武杉見学会等を実施。熊本芦北へ調査。

2010年

芦北で現役を退いた打瀬舟を17日間かけて回航して東京湾に運ぶ「舫」プロジェクト実施。

その他の活動

海ほたるPAライブ、木更津港・お台場へ。東日本大震災後に資金調達に頓挫し休止中。

2011年～2012年を中心とした活動

【木更津金田の浜活性化協議会の活動】

・2011年に旧NPO盤洲里海の会メンバーを中心に地元漁協、地元区等の協力を得て組織する。

・主な活動は、既存の漁業を有効活用しながらの地域活性化事業を実施。

脚立釣り復活（2011年～継続）

昭和40年代に東京湾で絶滅したと言われるアオギスを釣る独特の釣方である脚立釣り再現し、生息していた時代の豊かな海（干潟と河川の繋がり・汽水・餌場）を取り戻す切欠作り。

底曳き漁乗船体験（2011年～継続）

地元の漁業のひとつでもある底曳き漁の漁船を活用し、現状の東京湾でどのような魚介類が獲れるか多く市民に知ってもらい、漁業との係わり合いを深める。

～漁業者の生物多様性とは～

・今までの経験から漁業者ならではの活動からでも流域に関わる市民に海に関わる生物多様性のアピールが可能。

・食物連鎖から漁獲に繋がると言う意識持つ事が持続可能な漁業へ誘導可能と思われる。

・漁業権を有する特有の閉鎖的な漁業をオープンな場へ導き、市民（消費者）の理解を深め生物多様性の重要性を広報する場にも成り得ると感じる。